

## 日本のお城巡り 1人旅 (青春18きっぷを利用して)

3日目 3月12日 (水) 曇 福知山城と丹波亀山城址

行程 JR垂井発7:00発→米原7:29→大阪9:23発→京都駅8:40発→園部9:46→福知山11:03着→構内にて(おにぎり)→タクシーで行き、福知山城見学終了12:20分→タクシーで戻る、福知山駅12:53→園部14:16→亀岡14:31着→亀山城址見学→亀岡15:33→京都16:00→米原17:00→垂井17:25着

4日目 3月13日 (木) 曇 伊賀上野城と松阪城跡

行程 JR垂井発7:53発→名古屋9:25(踏切事故で20分遅れ)→亀山着10:25(接続待ち:構内でおにぎり)→伊賀上野12:02→タクシーで行き、伊賀上野城見学→タクシーで戻り、伊賀上野駅13:21→亀山14:16→松阪駅着15:08→観光案内所へ(御城印購入)タクシーで行き、松阪城跡タクシーを待たせて見学→松阪15:46→名古屋17:05→大垣17:45着18:15発→垂井18:25着

### I 福知山城

福知山城の歴史 (頂いたパンフレットから)



別名	横山城、臥龍城、八幡城、福智山城、搔上城	城郭構造	連郭式平山城		
天守構造	複合・連結式望楼型(1699年(元禄12年)築)				
現在:外観復元	(1985年(昭和60年)再)	築城主	明智光秀		
築城年	1579年(天正7年)	主な改修者	有馬豊氏	主な城主	明智氏、朽木氏
廃城年	1873年(明治6年)	遺構	曲輪、石垣、井戸、移築番所・門		
指定文化財	福知山市史跡(石垣部分)	再建造物	大・小天守・釣鐘門		

# 歴代福知山城主

## 安土桃山時代の福知山城主

明智光秀の滅亡以後、福知山城は一時的に羽柴秀長が管理し、その後杉原家次、小野木重次らの城主を迎えます。杉原家次は豊臣秀吉の正室ねね（おね）の伯父で「賤ヶ岳の戦い」の際には坂本城の守備を受け持った武将です。天正15年頃、小野木重次が福知山城主となります。慶長5年（1600）の「関ヶ原の戦い」では西軍として参陣し、細川幽齋が立てこもる田辺城を攻め、西軍が敗北すると重次は一時福知山城に立てこもりますが、やがて開城し亀山で自決しました。小野木重次没落後はしばらく細川忠興の預かりとなります。

## 江戸時代の福知山城主（朽木氏入部以前）

「関ヶ原の戦い」の後、慶長5年に福知山城には有馬豊氏が入ります。豊氏は在封中、「有馬検地」といわれる検地を実施しました。豊氏転封後は丹波亀山から岡部長盛が入ります。5年の治世の後、稲葉紀通が摂津国中島から転封。「稲葉騒動」を起こし、改易となったのちには松平忠房が入城します。

## 福知山城主 朽木氏

松平忠房は在城20年の後、「島原の乱」後の混乱が残る肥前国島原に転封し、常陸国土浦から朽木植昌が福知山に入って以降は13代約200年にわたり、朽木氏が福知山藩主を務めます。

朽木氏は歴代藩主の多くが奏者番などの幕府の要職を歴任。また、書画文芸に秀でて「星橋」を号した福知山藩主6代綱貞、オランダ商館長チチングとの交流など蘭学研究に通じた8代昌綱、書画を嗜み、また惇明館の建設などを行った10代綱方など学芸の分野に優れた藩主を多く輩出しました。

## 福知山城主一覧

歴代城主名	在封期間
1 明智 光秀	天正7年～天正10年 (1579) (1582)
2 羽柴 秀長	天正10年頃 (1582)
3 杉原 家次	天正11年頃～天正12年 (1583) (1584)
4 小野木重次	天正15年頃～慶長5年 (1587) (1600)
5 有馬 豊氏	慶長5年～元和6年 (1600) (1620)
6 岡部 長盛	元和7年～寛永元年 (1621) (1624)
7 稲葉 紀通	寛永元年～慶安元年 (1624) (1648)
8 松平 忠房	慶安2年～寛文9年 (1649) (1669)
9 朽木 植昌	寛文9年～宝永5年 (1669) (1708)
10 朽木 植元	宝永5年～享保6年 (1708) (1721)
11 朽木 植綱	享保6年～享保11年 (1721) (1726)
12 朽木 植治	享保11年～享保13年 (1726) (1728)
13 朽木 玄綱	享保13年～明和7年 (1728) (1770)
14 朽木 綱貞	明和7年～安永9年 (1770) (1780)
15 朽木 鋪綱	安永9年～天明7年 (1780) (1787)
16 朽木 昌綱	天明7年～寛政12年 (1787) (1800)
17 朽木 倫綱	寛政12年～享和2年 (1800) (1802)
18 朽木 綱方	享和2年～文政3年 (1802) (1820)
19 朽木 綱條	文政3年～天保7年 (1820) (1836)
20 朽木 綱張	天保7年～慶応3年 (1836) (1867)
21 朽木 為綱	慶応3年～明治4年 (1867) (1871)

## 初代城主 明智光秀

明智光秀は非常に謎の多い人物です。生年は享祿元年(1528)とも永正13年(1516)ともいわれますが、詳細は不明です。生誕地についても美濃国可児郡とも恵那郡ともいわれますが、判然としません。光秀が歴史の表舞台に登場するのは、永祿12年(1569)頃、光秀が織田信長に仕え始めて以降になります。

織田信長の家臣として、光秀は京都の統治や比叡山延暦寺攻めなどで功績をあげ、織田家有数の重臣となります。天正3年(1575)織田信長から丹波攻略を命じられた光秀は、丹波国人衆の大半を味方につけて、宇津城に拠る宇津氏や氷上郡に本拠を構える赤井・荻野氏などを攻めます。ところが天正4年(1576)1月になって突如波多野秀治が離反し、光秀は敗走します。その後は口丹波から反勢力の城郭を攻略しながら奥丹波へ迫り、八上城に籠城する波多野氏を半年以上に及ぶ攻囲戦の末、天正7年(1579)6月になって陥落させました。その後、鬼ヶ城や黒井城などを相次いで落城させ、ついに丹波を平定しました。そして信長から「その名譽は天下に比類なし」と高い評価と称賛を得て、丹波国の支配を任されました。

丹波支配にあたり、福知山の地に城を築き、城代として娘婿である明智秀満を入れました。また光秀は短い統治期間の中で、築城とあわせて地子銭の免除や治水事業を行うなど善政を行ったと伝えられます。光秀はほどなく、「本能寺の変」を引き起こし、「山崎合戦」の後、悲劇的な最期を迎えますが、福知山の民衆は光秀の事績を忘れることなく信奉し、「名君」として現在でも親しまれています。



明智光秀画像  
(大阪府岸和田市 本徳寺所蔵)

福知山城は明智光秀が天正7年(1579)ごろにこの地に城を築いたことから始まる。光秀は築城後、娘婿の明智秀満を城代として入れ、この地の統治を任せた。「本能寺の変」後「山崎合戦」やその後の一連の顛末の中で、光秀や秀満は滅ぼされる。福知山城は羽柴秀長をはじめとした城主を迎え、改修と増築が進められた。伝来している絵図の状況から江戸時代の有馬豊氏が城主の時期にはほぼ完成していたと考えられている。

由良川に対し伸びる丘陵を中心に築城された平山城で、城郭及び城下町周辺を堀

で囲み、それらを一体的に構築した「惣構え」の城として完成した。

江戸時代以降、転封や改易により城主が頻繁に変わったが、寛文9年(1669)に朽木植昌が常陸国土浦から入部して以降は、明治維新に至るまで朽木氏が13代にわたり藩主を務めた。

明治6年(1873)の廃城令により天守周辺の石垣や銅門を残し、福知山城はその大半が失われた。

しかし、昭和に入り市のシンボルとしての城再建の機運が高まり、市民による「瓦一枚運動」等もあり、有馬豊氏から松平忠房の頃の絵図資料を参考にした三層4階の望楼型の大天守と2層の小天守が、昭和61年に再建整備され、現在に至っている。



釣鐘門

## 隅櫓



## 転用石が墓石

自然の石を加工せずに、そのままの形で積み上げていく方法です。石垣が造られ始めた頃の手法に、野面積みが使われています。自然の形のまま石を積み上げていくため、石の間に隙間ができてしまいますが、そこには「間詰石」という小石を詰めていくのが一般的な野面積みです。

もともとは寺社などで使われていた石塔などが「転用石」として石垣に使われている。その数 500 以上。これだけ沢山の転用石を間近で見られるのは、全国でも福知山城だけ。

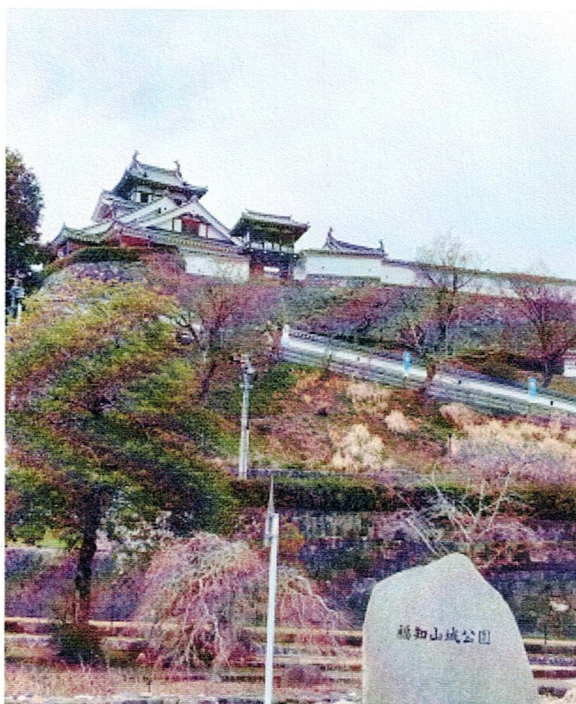


## 将棋の第 4 期竜王戦 天守閣にて

将棋界最高位のタイトル戦である第 35 期「竜王戦」七番勝負の第 4 局が、2022 年 11 月 8 日(火曜日)・9 日(水曜日)の 2 日間にかけて、福知山城にて行われました。福知山市のシンボルである、明智光秀が築いた城にて、藤井聡太竜王(王位、叡王、王将、棋聖の五冠)と広瀬章人八段が対局しました。

## 福知山城公園から登り口の杖を借りて登った

明智光秀が築城した城の中で、現在唯一、天守閣がある城です。



## II 丹波亀山城址（亀岡市観光協会 HP から）〈頂いたパンフレットから〉

別名 亀宝城、亀岡城 城郭構造 平山城 天守構造 不明、三重（1578年築）  
 複合式層塔型5重5階（1609年改） 築城主 明智光秀 築城年 1578年  
 主な改修者 岡部長盛 主な城主 明智氏、羽柴氏、石田氏、岡部氏  
 廃城年 1877年 遺構 石垣、堀

明智光秀は、天正5年（1577）頃、丹波攻略の拠点とするために丹波亀山城を築城しました。保津川と沼地を北に望む小高い丘（荒塚山）に築城しましたが、正確な史料が残っていないため全容は分かっていません。光秀は近隣の村から人を呼び寄せ、城下町を形成しました。天正8年（1580）に丹波国を拝領した光秀は、本格的な城下町の整備と領国経営に着手しますが、そのわずか2年後に「本能寺の変」が起こります。

亀山城はその

その後、羽柴秀俊（小早川秀秋）によって修築され、慶長15年（1610）岡部長盛の代に天下普請により近世城郭としての亀山城が完成します。この築城にあたっては城づくりの名手・藤堂高虎が縄張りを務め、五重の層塔型天守が造営された。

# 築城前期

## 明智光秀、平山に着眼

領国支配の軍事的な本拠地に



明智光秀公 画像  
（本居春房）

丹波八上 高城山合戦図  
（宝暦4年）

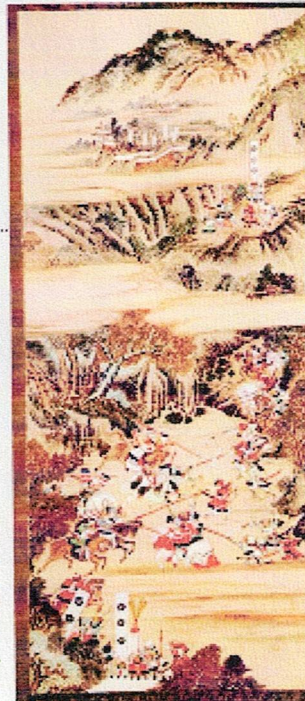
高城山とは、八上城（兵庫県篠山市）が築かれた山のことであり、波多野秀治はここを拠点に明智光秀と戦いました。この図は、上方に高城山と八上城を描き、そのすぐ下に丸に十字を旗印とする波多野の軍勢と采女に腰掛ける大將らしき武将（秀治か）を描いています。両軍の軍勢が入り乱れて争う山の置のやや下方には陣所があり、旗印には明智家の家紋である蛙模様が記されています。

亀山城の大きな特色は平山城にある。亀岡盆地を流れる桂川の右岸の小高い丘陵の上に築かれた、別名を「亀宝城」「霞城」などともいう。亀山城の築城、整備の歴史は、そのまま丹波における政治的動向と一致する。誰によって、いつ頃に、何の目的で築城されたのか簡単に辿ってみよう。

### 丹波平定に苦心する光秀

時は一気に天正3年（1575）へと進む。同年、天下統一を目指す織田信長は、明智光秀に丹波平定の命令を下す。丹波には八上城（兵庫県篠山市）の波多野秀治、黒井城（兵庫県丹波市）の荻野直正などによる反信長前線が形成されていた。その攻略の武将として光秀が指名される。丹波平定は天正7年（1579）に完了

するが、約5年という年月が必要であった。同4年（1576）には波多野氏の反撃に遭い、総退却までに追いつめられる。阪本城に帰陣し、光秀自身が病に伏している。それだけ彼等の抵抗が激しかったことを示している。



再度の丹波攻めに際して、光秀は同4年から5年にかけて、亀山城の築城に着手したと推定される。光秀は亀山城を桂川の氾濫から安全な小高い丘陵の上に築き、その南を通過する山陰道を取り囲むように城下町を形成した。丹波侵攻の軍事的拠点としての亀山城であることはいうまでもないが、光秀が

城郭を平山城とし、その背後に城下町を整備しようとした意図は、亀山の地が京都と山陰・中国地方を結ぶ上で、軍事・政治・経済面からみて要衝の地であることを熱慮し、丹波における領国支配の本拠地とすることにあった。山城をやめ平地に城郭を構えた着眼点の的確さと先進性は、その後の亀山城の歴史に強く反映されていく。

## 天守

明治初年に撮影されたものは、慶長 14 年（1609 年）に建てられた層塔型 5 重 5 階の大天守と 2 重の小天守が複合した複合式天守である。大天守の最上階には飾りの回り縁、高欄を付け、最上重屋根に入母屋破風と軒唐破風があるのみで、それ以外の階や重には、装飾的な窓や破風は一切ない。

亀山城の天守は、創建当初では明智光秀によって 3 重の天守が構えられ、後の小早川秀秋の時（文禄 2 年（1593 年））に 5 重に改築されたという。

### 層塔型の初例とする説

丹波亀山城の天守を、日本初の層塔型天守であるとする見解もあるが、『寛政重修諸家譜』を根拠に今治城天守（1604 年から 1608 年の間の建造）を移築したものであるという説がある。この説では、徳川家康がこの亀山城を天下普請によって造営した際、縄張設計を担当した藤堂高虎が、元々自身の居城である上野城へ移築するために解体していた用材を献上し、建てたものであるとしている。これを元に、今治城天守を層塔型天守の初見とする説がある一方で、今治城天守の外観や規模は不明であり、また天守の存在について発掘調査からは認められてはいない。

## 明智光秀の功績



### ① 国人衆らを家臣として任用！

当時は、どこの土地においても必ず「国人衆」という中間的支配者が存在していた。領民は国人衆などによって支配され、その国人衆らは領主によって支配されるといった形が、鎌倉時代後期あたりから続いていた。明智光秀は、この様な古い体制を排除し、その土地のことをよく知る国人衆たちを家臣として取り立て、代官に任用します。無駄を省き、人材を上手く活用した光秀の政治手腕のひとつといえるでしょう。

### ②. 人心を掌握し、旧幕臣衆をうまく任用した「光秀の人材抜擢術」

旧幕臣衆を家臣団に組み込み、織田信長軍の中でも最も大きな軍団へと成長した明智光秀は、出身・家柄などは関係なく能力主義でポストを決めていた。このあたりは信長と相通じるものがあったといわれる。しかし、二人の最も大きな相違点は、光秀は家臣の心情を深く理解し、信長軍の中では「途中入社組」である自分を全力でバックアップする家来に感謝し、裏切らなかつたことだ。光秀の家臣に対する労いは、合戦で討ち死にした家臣を

列記し、近江国の西教寺に供養米を寄進しているのをはじめ、合戦で負傷した家臣に対する疵養生の見舞いの書状がいくつも残っていることから、家来思いの光秀像が伝わってくる。

### ③ 家中軍法

18 条からなる家中軍法は、明智光秀が本能寺の変の 1 年前に福智（知）山城で制定したものといわれている。1 条から 7 条までは、軍団の秩序と規律について記し、8 条から 18 条までは、100 石単位の禄高に応じた軍役の基準を明確にしている。また、「定家中法度」では武具の置場所から織田家中の他の部将への挨拶の仕方まで記してある。それまで織田家中には軍法は存在していなかったこともあり、他の部将もこれに倣って、家中軍法を作った。

#### ④ 領民を思い、地子銭を免除した光秀の経済的な功績

明智光秀は本能寺の変で信長を討った後、上洛すると京周辺の朝廷や町衆・寺社などの諸勢力に金銀を贈与した。そして、洛中や丹波の地に対して地子銭（土地税・住宅税に相当）を永代免除するという政策を敷いた。この様に、光秀は丹波の民にとっては良策をもたらす領主だったのかもしれない。

### 亀山城の歴史

天正三年（一五七五）明智光秀丹波攻略開始  
 天正五年（一五七七）明智光秀近藤秀政の荒塚山居館を利用し亀山城築城  
 天正七年（一五七九）明智光秀丹波平定  
 天正十年（一五八二）本能寺の変 山崎の合戦（以降豊臣家の支配下）  
 天正十一年（一五八四）羽柴秀勝（信長四男）と豊臣秀勝（妻のお江、関白秀次（弟）の弟）と豊臣秀俊（後の小早川秀秋）城主となる  
 天正十九年（一五九一）本丸（二ノ丸）三ノ丸築  
 文禄四年（一六一五）前田玄以（五奉行）が丹波亀山城を領す  
 慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦い（以降徳川家の支配下）  
 慶長七年（一六〇二）丹波亀山城は天領となる  
 城代官 北条氏勝 城下町南限敷設完成  
 慶長十一年（一六〇六）城代官 権田小三郎 城内の内堀完成  
 慶長十四年（一六〇九）徳川譜代家臣の岡部長盛が丹波亀山城を領す  
 慶長十五年（一六一〇）西国大名を動員（天下普請）して亀山城整備  
 藤堂高虎が興張りし、今治城の天守を移築  
 元和七年（一六二一）その後の城主に松平（大給）二代も普請家二代も松平（藤井）家三代も久世家も井上家も青山家三代も松平（形原）家八代と継がれる  
 明治二年（一八六九）版籍奉還により亀山藩を亀岡藩と改称  
 明治六年（一八七三）亀山城の廃城が決まる  
 明治十年（一八七七）京都商人・森山喜兵衛が払い下げを受け天守閣を取り壊し  
 明治十一年（一八七八）亀山城御殿表門が売却される  
 明治十二年（一八七九）亀山城石垣を売却  
 明治二十二年（一八九五）上村新兵衛（北町）が亀山城址を登記  
 明治三十六年（一九〇三）田中源太郎（北町）田中敷之助（安町）亀山城址入手  
 大正八年（一九一九）出口王仁三郎 本丸・二ノ丸址の三ノ丸も坪入手  
 大正九年（一九二〇）整地のため開拓に着手 石垣の修復と整備を開始  
 大正十五年（一九二六）山崎忠文（横町）より亀山城址東側一ノ丸も坪入手  
 昭和五年（一九三〇）黒川儀兵衛（安町）より亀山城址中の島一ノ丸も坪入手  
 昭和十年（一九三五）第二次大東事件勃発（大本は政府の弾圧を受ける）  
 昭和十一年（一九三六）政府は全ての建築物また城跡石垣を破壊  
 昭和十七年（一九四二）治安維持法違反無罪判決  
 昭和二十年（一九四五）大審院判決・不敗罪判決  
 昭和二十二年（一九四五）破壊された亀山城址・石垣の再修復と整備を開始

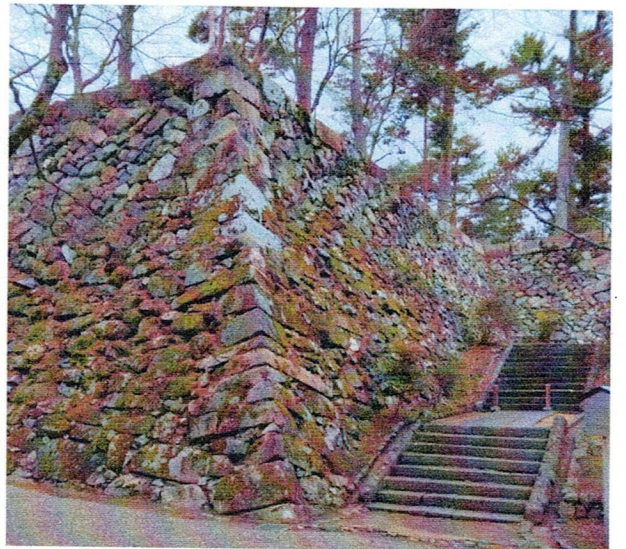
#### 亀山城址に残る刻印

天下普請で完成した亀山城は、多くの西国大名が夫役として動員された。そのことを示すものとして、残っている城址の石垣のうち、55カ所に17種類の刻印を見ることができる。刻印は、石垣普請に参加した諸大名が、その石を運搬したことを示すために刻んだものと言われている。

#### 亀山城当時の本丸入口



復元された天守石垣  
 下から約3分の1は、光



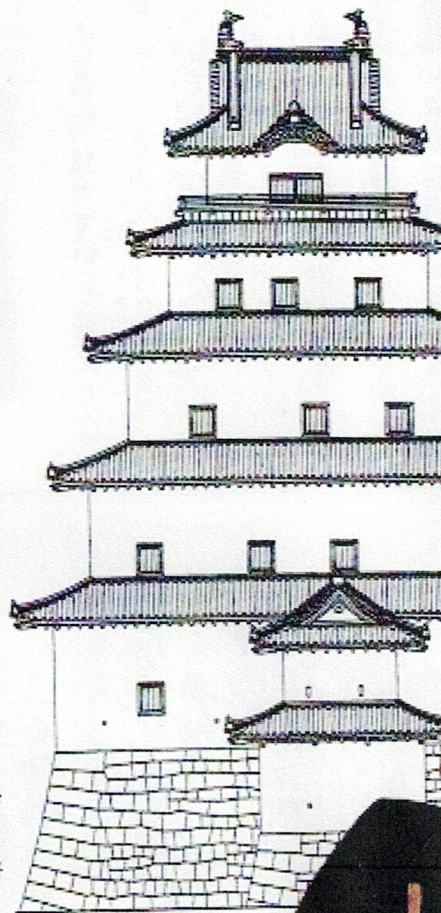
秀築城当時の穴太積みが奇跡的に残っている。

# 築城後期 ——存続期へ——

## 築城の名手、藤堂高虎

とう どう たかとら

龜山城修築に自国の天守資材を献上



藤堂高虎 画像 (四天王寺蔵)



現在の今治城天守 愛媛県今治市

藤堂高虎が慶長9年(1604)に今治城を築城しました。海岸部に築かれた平城で、幅三十間(約55m)にもおよぶ三重の堀には海水を引き入れ、舟入り(港)をもつ海城でした。

慶長13年(1608)、伊勢国(三重県)津城主に任じられた高虎は、新たな領国の居城に使用するべく今治城の天守を解体し、藤堂家の大阪屋敷へ運びました。

高虎は最初、伊賀上野城(現・三重県伊賀市上野)の天守にと考えていたようですが、慶長15年(1610)閏2月に龜山城の天下普請が発令されると、これを徳川家康へ献上し、龜山城の天守とすることを進言します。

高虎が去った後の今治城では、天守は再建されず、本丸には破風をもった北角櫓などが建造されました。現在の天守は、昭和55年(1980)に再建されたものです。

丹波龜山城は近世城郭として完成するが、京都に接する地理的要因と軍事的重要性から本格的な天守を必要としていた。

そこに登場したのが、当代一の築城の名手として誉れが高く、数々の築城を手懸けた大名、藤堂高虎であった。徳川家康の信任が特に厚かった高虎は、「天下普請」の縄張、「城の設計」を担当しており、膳所城、篠山城などの築城に携わっていた。龜山城で高虎は、全国で最初の、かつ最新の層塔型五重の天守を実現させ、城造りの名声をさらに高める。

高虎の事跡を記録した『宗国史』には、「庚戌十五年(慶長十五年)夏六月、丹波龜山城を修む。公(高虎)役を督す。大將軍(徳川家康)書を賜ひ勞を問う。公、今治城天守樓を献じ之を龜山に建つ」とある。

——大阪城を拠点にした反徳川勢力との緊迫した対立状況下で、高虎による丹波龜山城の層塔型五重の天守建設が、家康をも喜ばせる政治的動向と深く関与していたのである。

ここでは、明智光秀公の功績と藤堂高虎の築城名人の偉大さを再認識できた。



### III 伊賀上野城



別名 白鳳城、伊賀上野城 城郭構造 梯郭式平山城  
天守構造 5重5階（完成間近に倒壊）層塔型3層3階（復興、木造・1935年築）  
築城主 筒井定次 築城年 天正13年（1585年）主な改修者 筒井定次 藤堂高虎  
主な城主 服部氏 仁木氏 筒井定次 脇坂安治 藤堂氏

### 伊賀上野城（白鳳城）の沿革

昔この高台に平楽寺とよぶ伽藍があったが、天正9年（1581）織田信長軍の侵攻にあって焼失した。世にいう「天正・伊賀の乱」である。

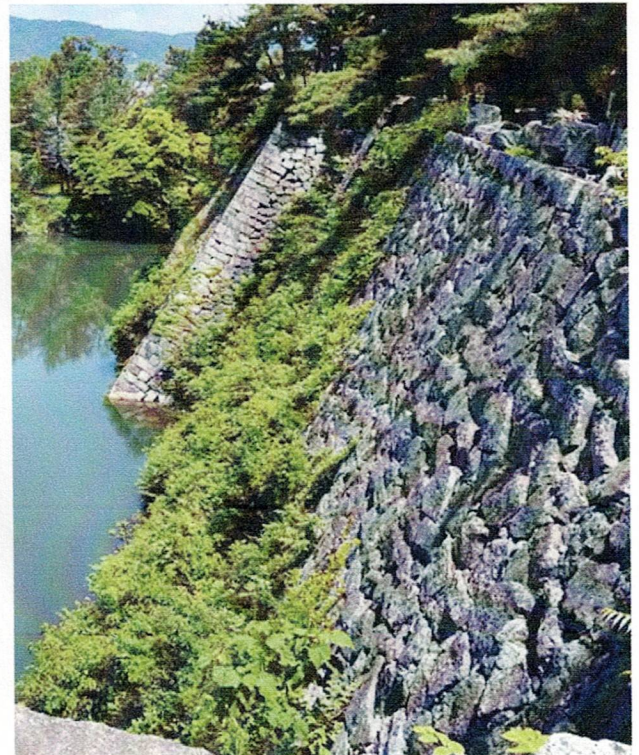
この乱後、伊賀国主となった筒井四郎定次は城塞の大修築を行ない、城下町の建設に着手した。しかし、のちには重臣の暗闘のため、慶長13年（1608）失政を理由に改易となり、藤堂高虎が伊予国から移封されて伊賀・伊勢の領主となった。

高虎は城郭を拡張、とくに大阪方（豊臣方）に備えるため、西方には広大な高い石垣めぐらした。（この石垣の高さは日本一といわれている）また城下町を南へ移して、完全に武装した軍備の町を建設した。

したがって、当時の築城・軍略の大家、高虎によって、めんみつに設計され形造された伊賀上野の町は、現在日本でもごく小数の貴重な歴史的な町といわれている。

天守閣は慶長17年（1612）工事半ばにして暴風雨のため倒壊したが、昭和10年（1935）川崎克氏（地元出身代議士）が私財を投じて復興、現在の上野城を再建した。

廃城年 明治4年(1871年) 遺構 石垣、堀、武具蔵  
 指定文化財 国史跡 俳聖殿(国の重要文化財) 天守は伊賀市指定有形文化財  
 再建造物 天守(模擬、木造)



天正13(1585)年、豊臣秀吉の命により大和郡

山から伊賀の領主となった筒井定次が平楽寺跡の高台に城郭と三層の天守を築き、尾張、三河の東方の勢力に備えた。定次は慶長13(1608)年に改易となったが、天守は寛永10(1633)年の大風雨により倒壊するまで残っていた。

慶長13(1608)年に筒井氏に代わって徳川家康の命により今治城主藤堂高虎が伊勢安濃津・伊賀に転封となった。筒井氏の本丸を西に拡張し、大坂の豊臣方に備えて高石垣を築いた。慶長17(1612)年の暴風雨により五層の天守は未完成のまま倒壊した。大坂の陣で勝利した徳川幕府は城普請禁止策により天守は再建されないまま、城代家老の執政体制が幕末まで続いた。



### 天守閣の内部にあった藤堂高虎の像

慶長 19 年 (1614 年)、元和元年 (1615 年) の 2 度に渡る大坂の陣で家康の勝利となり、豊臣氏の滅亡で堅固な城が必要なくなり天守は再建されなかった。本丸に櫓は建てられなかったが、外堀の土塁上には、二層櫓が二棟、単層櫓が八棟、計十棟の櫓が建てられ、長さ二十一間、両袖に七間の多聞櫓をつけた東大手門、西大手門も建てられた。高虎は大坂の陣が終わった後、交通の便利がいい津城を本城とし、上野城を支城とした。

一国一城令で上野城は伊賀の城として存続が認められると、高虎は弟の藤堂高清を城代とし、高清の死後は藤堂元則が城代となり、文政 8 年 (1825 年) に藤堂高猷が最後の城主となるまで藤堂氏の世襲とした。

藤堂高虎が大規模に改修した時は、大坂城の備えとして西側の防備を固めた。これは、徳川家康が不利となった場合、この城で籠城する時に備えて、相当数の兵員を収容できるよう、細部の完備や美観を整えるより実戦本意に配慮した。藤堂高虎は伊賀忍者に命じ、58 カ国、148 城を密かに忍ばせ要害図を盗写させ、伊賀上野城を改修の参考にしたという伝承が残っている。

大坂城の高石垣とともに日本で一、二を競う石垣は 1611 年 (慶長 16 年) に「打込はぎ」の技法で築かれ、根石より天端まで 29.7m の高さを誇り、三方に折廻して、延長 368m に及ぶ。

天守の位置を西側に移動し、今治城天守を移築しようとしたが、天下普請となった丹波亀山城に献上したため新規に 5 層天守を建設した。筒井時代は、上野城は大坂城を守る出城としての機能を持った城であったのに対して、藤堂時代は大坂城を攻めるための城というまったく正反対の立場をとった城とされている。

注 上記の文章はフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』から



#### IV 松坂城跡（国指定史跡 松坂城跡 松阪市文化課発行の冊子から）



松阪は、古くから南伊勢地方の入口として、多くの人々が行き来し、生活をしていました。その結果、宝塚古墳をはじめ、三重県内でも多くの遺跡が見つかる地域です。

##### 公阪のもとを築いた蒲生氏郷

天正12年(1584)、南伊勢12万石の大名として蒲生氏郷が、今の滋賀県から松ヶ島城(松阪市松ヶ島町)に入ります。その後、四五百森という小高い丘で新しい城造りを始めます。城造りを始めて3年後の天正16年(1588)、氏郷は新しくできた城に入り、ここを本拠地としました。それと共に、この地を「松坂」と名付けました。

氏郷は、参宮街道のルートを変更し、松ヶ島から商人や職人、神社仏閣を新しい城の周囲に移すと共に、楽市楽座を行って氏郷の出身地である近江日野や伊勢大湊の商人を受け入れるという、今までにない新しい城と城下町を造ろうとしました。これが後に江戸で活躍をした「松坂商人」の始まりとなったのです。

##### 服部・古田氏の時代

天正18年(1590)、氏郷は今の福島県会津若松市へと国替えとなりました。その後、服部氏・古田氏が松坂の領主となりました。江戸時代の資料によれば、古田氏の時代には松坂城が再建・完成したと記録されています。

##### 和歌山藩領の時代とその後

元和5年(1619)8月、徳川家康の子頼宣が和歌山藩主となった際、松坂は和歌山藩領となり、明治4年(1871)の廃藩置県まで和歌山藩の伊勢国領支配の拠点となりました。

明治22年(1889)、町制施行に際して地名を「松坂」から「松阪」と表記が変更され、現在に至っています。

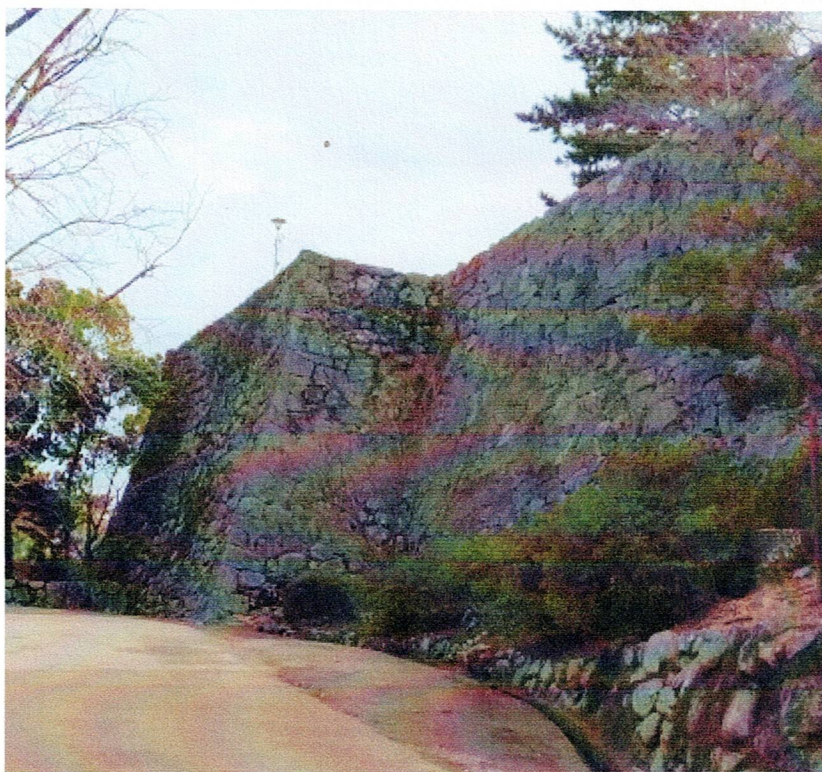
# 松坂城関連略年表

年号	西暦	主な出来事
弘治2	1556	北畠具教、澤氏に西黒部村塩竈の権利を新たに与える 蒲生氏郷 近江国日野城に生まれる
永禄11	1568	蒲生氏郷 13歳で人質として織田家に入る
永禄12	1569	織田信長 兵8万騎余りを率い南伊勢の北畠氏討伐に出陣する 織田信長軍 阿坂城を攻囲。城主大宮入道、子息大丞九兵衛、自ら浄眼寺を焼く 織田信長軍 7万騎余りが大河内城を包囲。翌日明方から総攻撃。この時、蒲生氏郷は14歳で初陣。戦功を挙げる 北畠具教、籠城50日余りで伊勢国内の關所撤廃・諸城破却を条件に和睦。信長次男信雄を北畠氏の養子とする
元亀元	1570	齋藤長助が飯高郡矢川庄四五百森に築城
天正8	1580	北畠信雄、松ヶ島の蔵方に法度を下す 田丸城焼失。北畠信雄、飯高郡細頸に築城し、松ヶ島と名付ける
天正10	1582	織田信雄、尾張国清州城に移り、津川義冬が松ヶ島城を守る 北畠具親軍、大河内村近辺に打ち出でことごとく放火する 北畠具親、再び多気郡五箇篠山城で挙兵。翌年1月2日、伊賀国へ敗走する
天正12	1584	織田信雄、伊勢国長島城で松ヶ島城の守将津川義冬を殺害し、同城を属城とする 羽柴秀吉の命により、織田信兼・九鬼嘉隆・田丸具直・岡本良勝・藤堂高虎・津川三松などが織田信雄の属城松ヶ島城を包囲し 在々に放火し、総攻撃を開始する 筒井順慶、松ヶ島城二ノ丸を落とす。4月下旬、慶宝比丘尼が秀吉の陣に講和を斡旋。岡本良勝が松ヶ島城を受け取る 蒲生氏郷、近江国日野城から松ヶ島城へ入城。南伊勢12万石を領有
天正13	1585	蒲生氏郷、以後3年間に亘り飯高郡丹生官山から新城建築用材を伐り出す。また、大坂で洗礼を受けレオと称する
天正16	1588	豊臣秀吉、氏郷に羽柴姓を与える 蒲生氏郷、飯高郡矢川庄四五百森に築城。松坂と改める 蒲生氏郷、12ヶ条の町中掟を公布する この年、本町・大手町・工屋町・紺屋町・博労町・油屋町・中町・日野町・鍛冶町・下職人町・白粉町・櫛屋町・平生町・新町・桜屋町・大工町・魚町・牛頭天王社・正円寺・宝光院・龍華寺・弥勒院・来迎寺・樹敬寺・養泉寺・清光寺・蔵方などが松ヶ島から松坂に移る
天正18	1590	蒲生氏郷、陸奥国会津若松城へ転封。12郡40万石を領有
天正19	1591	服部一忠、松坂城主となり3万5千石を領有
文禄4	1595	蒲生氏郷、京都で没す。享年40歳。大徳寺に葬られる 服部一忠、豊臣秀次逆心事件に連座し改易となる。古田重勝、松坂城主となり3万4千石を領有
慶長年間	1596 ~1614	吉田氏、松坂城を再興造営するという
元和元	1615	一国一城令公布される
元和5	1619	徳川頼宣、紀州へ入封。勢州18万5千石を合わせて55万5千石を領する。松坂城は松坂代官の預かりとなる
寛永14	1637	松坂城は松坂奉行の預かりとなる
正保元	1644	大風のため、天守閣が倒壊するという
元禄6	1693	三ノ丸の御鷹師役所(鷹部屋)廃止
元禄15	1702	松坂城は松坂城代の預かりとなる
宝永6	1709	表通りの石垣7カ所を修復
宝永7	1710	裏門筋の石垣2カ所を修復
安永6	1777	石垣修復
寛政6	1794	二ノ丸に御殿(徳川陣屋)の改築
文久3	1863	三ノ丸に御城番長屋竣工
明治10	1877	二ノ丸の御殿(徳川陣屋)が焼失する
明治14	1881	県管轄の「松坂公園」として認可される
昭和26	1951	本丸跡に配水池が設置される。市民病院建設により、三ノ丸鷹部屋・両役所付近の石垣が撤去される
昭和27	1952	三重県指定史跡に指定される

松坂は、標高約 38mの独立した丘陵に築かれた平山城で、北側を流れる阪内川を防御ラインとした要害の地に立地している。丘陵を切通しで南北に分断し、中核部である北丘、城の鎮守神を祀る南丘、両丘の周囲の三の丸で縄張りが構成されている。

北丘は、本丸を中心として東側に二の丸、南側に隠居丸、城の堅圀には権固な石垣を巡らせている。また、城の周囲には三の丸を取り巻く形で土居、その外側には堀があった。

城の出入り口は北東の大手口門、南東の瀬手口門、南の無名門、南西の五曲口門の4カ所があった。



城ができた頃の石垣は「野面積み」と呼ばれ、自然石がそのまま積み上げられていた。石を加工せずに積み上げたため隙間や出っ張りができ、敵に登られやすいという欠点があったが、排水性に優れ、頑丈であるという長所もあった。

江戸時代には3回ほど石垣の修理が行われている。その際には新しい技法が用いられた。また、石垣を注意深く見ると、古墳時代の石棺等の石造物の一部が使われていることがわかる。

嘉永7年(1854年)6月に、伊賀上野地震があり伊賀上野城をはじめ城下町に大被害があり、城内の建物の多くが壊れ、石垣が所々で破損した。その後御殿、城代役所、武具蔵、米蔵をはじめ、東大

手門、西大手門等、城として最小限のものが補修されたが、外郭の櫓は再建されず、倒壊をまぬがれた太鼓櫓と菱櫓が残るものとなった。

最後に、春の「青春18きっぷ5日間」を上手く利用して、和歌山城、岸和田城、明石城と尼崎城、大阪城、後は、福知山城、丹波亀山城址、伊賀上野城、松坂城跡を見学できたことで名城巡りのも70城近く訪れたことになる。藤堂高虎が携わったお城が随所にみることができ、彼の建築学は現代に通じる高い技術力で感激を覚える。大坂城天守の作事奉行だった小堀遠州は黒田如水、藤堂高虎、加藤清正と並ぶ築城の名手と言われていることを知る。築城の名人と言っても以前から知っている3人は普請(土木工事)を中心とする築城名人ですが、小堀遠州は作事(建築工事)を得意とする築城の名人です。また、自然地形を利用した涌泉を引いた庭園を造りや茶人としても有名です。次回は会津若松城・二本松城・仙台城・多賀城・仙台城・白河小峰城を見学予定です。